

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

第94回

日蓮宗慈雲寺住職  
松野妙慶さん

すべてはお寺と檀家さんのため。  
それが私の恩返しです



まつのみょうけい 1944年生まれ、大阪府出身。26歳のときに結婚し、慈雲寺へ。1989年に先代住職である夫と死別。1992年に出家。身延山での修行を経て、1996年より住職に。1993年には放火で庫裏を焼失するも、再建を果たす。波瀾万丈な人生を歩みながらも、片時も感謝の心を忘れない明るい住職として檀信徒に愛されている。

私は26歳のときに先代住職である夫と結婚し、横浜にある慈雲寺に嫁いできました。

結婚当初は世間知らず。朝5時半に起きて化粧をし、ミニスカートをはいていたたら、義母に「なんて格好してるんだ」と怒られました。当たり前ですよね(笑)。すぐにモンベトリヤカーを渡されました。朝から晩までお掃除です。「きついな」と思いましたが、そのうちにそれが素晴らしいことだと気づきました。そんなふうに、世間知らずの私に義母がいろいろなことを教えてくれました。

住職である夫の突然死。  
主婦から一転、僧侶に

4人の子どもに生まれ、専業主婦として幸せに暮らしていましたが、1989年、夫が53歳で突然死しました。あつという間の別れ。お寺には義母、義姉と義妹、私と4人の娘、女ばかり8人が残りました。それでも残された者は生きていかなければならない。でも、このお寺をどうしたらいいのか……私は途方に暮れました。

代々継がれてきたお寺を、私のような者が守れるのかと悩みましたが、檀家のみなさんが「できなくてもいいよ」「このお寺が続いてくればいい」と。それがとてもありがたく、4年近く葛藤しましたが、1992年に出家しました。

ところが、身延山に修行に行くという矢先の1993年2月、私たちが暮らす庫裏が放火にありました。古い建物でしたから、あつという間に全焼。本堂とお堂は残りましたが、それ以外はすべて灰になりました。残ったのは体ひとつ。それでも「親からいただいた体だけは自分の財産。がんばらなきゃ」と奮起しました。

出家してからは、組寺(地域の寺院の組織)の僧侶のみなさんに支えていただきました。ある僧侶から「女じゃダメだよ。男になれば」と言われました。「女を捨てて一生懸命やらないとできないよ」と。私はそれを肝に銘じました。

ひとりでは何もできない。  
檀家さんの支えで今がある

私は声が甲高く、お経も下手でした。でも檀家のみなさんが「がんばらなくていいよ」「私たちがついているから」と励ましてくださいました。私が今、住職をさせていただいているのは檀家さんのお陰。それだけみなさんに育てていただき、支えていただいたから、これまでやってこれたと思います。

私は何もできません。私にできるのは檀家さんに寄り添い、お寺を居心地のいい場所にする。そして、大切なときにお役に立てるように、すぐに駆けつけることだけです。そして、女を捨てる覚悟で邁進してきましたが、やはり女性にしかできないことをやりたいというのが私の志。それが、お寺でもなれます。

檀家さんが毎日のようにお寺に来てくださり、お茶を飲んだりおしゃべりしたり。みなさん「心がスツとした」「元気をいただいた」と言ってくれます。それが私の「お寺でもなれ」であり、私ができる精一杯の恩返しです。



横浜市港北区にある慈雲寺。1925年に現在の地へ移転。本堂右のお堂には500年以上前の鬼子母神が祀られている。